

の力をますことによつて、日本語を外国に輸出することはあえて不可能ではないであらう。

(宮崎県立図書館長)

言葉テナヤワシヤ

尚 紅蓮

(グレン・シロー)

日本語という言語は非常に魅力のある言葉です。同時に極めて複雑な「こと」の葉です。

もつともわずかな単語と言いまわしをおぼえることは大した苦勞ではありませんが、深く入ると浮き上がる見込はまずありません。

発音の方はそんなにむずかしくはありません。勿論外人なまりは永久に残ります。英語を話すときには口を大きく動かさなければ、言葉がきれいに生まれませんが、日本語は正反對です。日本語は口を出るだけあけないでしゃべる言葉です。口を大きくあける若い女性の音楽家が英語で歌をうたうのを見るときは、音のしゃべっても口を確に動かさなかつた日本の婦人のことを思わずにはいられます。

ん。昔の婦人は紅茶をいたたく折にも、そえもののお菓子を手を口にかざして一寸かじつてはすましていたのでした。男はそんな真似はしませんでしたが、あまり口を動かさないので物をしゃべりました。ですから、英語を話す場合になつても、日本人は口を半分あけて日本式の英語をしゃべるのです。反対に西洋人が日本語を話すときには、口をあけすぎて西洋式の日本語を御披露するというようになります。勿論両方とも例外というものはあります。それはごくまれです。

日本語は明確でない、よく人が言いますが、この批評こそかえつて的確ではないのです。もつとも言いたいことを露骨に表わしたくない場合にぼんやりいう言ひ方は英語にも日本語にも沢山あります。西洋の落し話のおかしさも日本の落し話のおかしさも同じところから出ています。つまり言葉のあいまいさから出るおかしさです。言葉にはこうした性質が元々あるのですから、弁護士が西洋でも東洋でも同じような意味の言葉を数限りなくならべて、出来るだけ意味の間違ひが起らないようにいたしております。同時に、西洋の言葉でもそうなのですが、日本語でも、もの

をはつきり言いたいときには、はつきり言える言ひ方がちゃんとあるのです。

しかし俳句や歌や詩を書きたいときには、弁護士ばかりでは困ります。やはり詩人にならなければなりません。この場合には事実より想像と感情の方が問題なのです。日本語はあらわれたり消えたりする霧のぼんやりした景色や気持をよくあらわす力を十分に持っています。英語も御多分に洩れませんが。

私が一番早くおぼえた日本語は「お早う」という言葉でした。勿論「人力車」とか「ゲイシャ」というような言葉は前から知っていました。日本人の留学生が私に「お早う」という日本語を教えてくれました。覚えるのは簡単でした。どうしてかと申しますと、その言ひ方はアメリカのオハイオ州の「オハイオ」によく似ていましたから。日本語の「お早う」を覚えたある米人がオハイオ州のとなりのケンタッキー州ととりちがえて、あくる日日本人に会ったとき、いきなり「ケンタッキーこそいます」と言った笑い話は皆さん御承知のことでしょう。

けれども私がかしたこれに更に輪をかけ

たひどい間違いは未だ多分お耳に入っていないでしよう。戦前ある女子専門学校で女の学生にある男がチブスでわていることを英語で教えようとしていたときに、相手の学生がどうもわからないらしいのを見てとった私は一寸日本語の説明をはさもうという大それた野心を起して、思わず「あの男はチブサを病んでいます」とやってのけました。学生たちは一人も笑わず、クラスの四十人が、八十の目を残らずバチバチさせはじめたところで、私がやつと気がついて「ちがう、ちがう、チブスだよ」とあわてて言いなおしたら、さあ大変、みんなわれんばかりに笑い出しました。

実は日本語には発音が似かよっていることが沢山あります。魚屋に行つて「このサカナはいくらですか」といいたるところを「このカタナはいくらですか」とか、あるいはエハガキを手にとって「このハミガキは？」と日本語をおぼえはじめの西洋人はよくまちがえます。

自分のことをわが輩という年輩の人々は古い言葉をとかくつかいます。たとえば「映画」のことを「活動」と言ったり、「アイロン」のことを「ひのし」といったりします。若い

連中——ではない、連中がきいたら「何いうてなはるんや」と思う場合がさぞ多いでしょう。反対に若い者が「オース」なんて言いますと私もはびっくりして、ききなおすほどです。まことに世はテンヤワンヤです。

そして日本人が英語をどっさり使うので、私どはコップを「CUP」だと思つてコーヒをコップ一杯だと思つて注文すると、女ボーイが手もつけられない熱いガラスのいれものに持つて来ます。困るのはこちらもボーイさんも同じです。

話す場合ばかりではありません。聴もうとすると、アブレゲールの略した漢字によつかります。戦前におぼえたむずかしい本字の代りに、一寸も似ていない代物が出現します。前後関係から判断する外に手がありません。例えば「壺」は今では一尺二尺の尺の中に二つ点を打つて書きますが、これなど私から見れば正に言語道断ですね。

でもこんな話をしていきますと、それこそ尽きるところを知りません。ですからつい先だつてあつた節分に関連して思い出した出来事を一寸お話ししておきましょう。ずっと前の

こと泣く手に手こずつておぼあさんが、通りあわせた私を見て「そらごらん、泣くとこの鬼さんが取つてしまふよ」というのをきいて、私は「おぼさん、それはひどいよ、人を鬼なんかにして」と言いましたら、おぼあさんは「いいえ、わたしはおにいさんといつたのでございます」と答えました。うまく言いがれたものです。私もおぼあさんにならつて、この辺で逃げ出すことにいたします。

(アメリカ大使館 文化アタッシェ)

『言語生活』 54
1956.3